

## 限界集落を抱えた首長の挑戦

綾部市長  
四方 八洲男

四方八洲男（しかた やすお）

1940年綾部市生まれ。1963年京都大学経済学部卒業後、三菱重工業に入社。1978年から綾部市議会議員を2期、1987年から京都府議会議員を3期務めた後、1998年に綾部市長に初当選。現在3期目。2007年から京都市市長会会長。世界連邦宣言自治体全国協議会会長も務める。

### 綾部の風土と思想を象徴する大本教とグンゼ

**富野** 綾部は歴史が古いだけではなく、近代の中で非常に重要な役割を果たした町です。大本教とか、グンゼという特色のある、今の社会貢献に関係あるような企業が生まれてきたところですよ。現代、いい町として多くの方々に愛されているところでもあります。最近、「水源の里シンポジウム」など、山村地域で問題になっていることについてリーダーシップを発揮されて、この問題の解決に頑張っておられます。そのトップリーダーとして、市長としてのいろんな思いや戦略があるということで、今日はお招きをさせていただきました。早速、市長さんにお話をさせていただきます。その後、質疑応答をさせていただきます。NPO・地方行政研究コースの院生を中心に綾部のことを勉強させていただきましたので、市長さんと直接いろんな議論をさせていただく場を持たせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

**四方** 皆さん、こんにちは。龍谷大学に富野さんが来ておられることは知っていたん

ですが、お会いするのは今日が初めてでございます。しかし人間というものは不思議なもので、何かのことで印象が残っていると、初めて出会っても何か前から知り合いであったかのような気がするものでございますが、逗子市長をやっておられた時、米軍住宅問題をめぐって市民の皆さん方と一緒に闘われたんですね。そういうことを覚えておりますし、その後、島根県へ行かれたりしているという動静は新聞で伺ってしまして、今日、お会いして、私も丹波の山奥から出てきてよかったかと、まず思わせていただきました。皆さん方もよい先生を龍谷大学にお迎えになったなと思います。聴講しておられる方々の評価が給料に反映する時代に入ってまいりましたから、ぜひ高得点を差し上げていただきたいと思います。

何はともあれ今、ご紹介を受けましたように、若干、資料の中に経歴が書いてありますので、現職で何をやっているかがわかると思いますが、私がおります綾部市は宗教法人の大本という宗教がございまして、戦前、大正10（1921）年と昭和10（1935）年に2回、

治安維持法や不敬罪を中心とする大きな弾圧を受けております。戦後はもちろん無罪になりました。しかし8年5カ月くらい出口王仁三郎（でぐち・おにさぶろう）さん、出口スミさんなどが未決勾留されています。2000人の信者さんが引っ張られるという、宗教史上、世界的に見ても大きな弾圧を受けて、今、それが蘇ってきつつあります。そういう宗教の聖地でもございます。

ゲンゼというのは製糸業としてはまさに日本のさきがけで、120年くらいの歴史があります。残念ながら製糸業はもうなくなったんですが、当時、諏訪とかでは野麦峠の女工哀史がありまして、あちこちから貧しい農村地域の少女がかき集められ、1日15時間以上という、考えられないような労働を強いられました。その中で堪えらなくなって脱走する、でも追いかけて捕まえてまた戻される、という『女工哀史』の物語があるわけですが、同じような時期に綾部でゲンゼという会社が生まれたのです。

ゲンゼでも、その当時の労働基準法では15時間だったんですが、15時間目一杯働かせることはありました。しかし、それが終わると、会社の中に誠修学院をつくって全国の農村から来られた子女を教育した。しつけから料理・裁縫まで、「嫁をもらうならゲンゼからもらえ」と言われたくらいでした。工場は学校である、学校は工場である、表は工場だけど裏は学校の門であるという哲学、思想のもとに創業者の波多野鶴吉さんがつくられたのです。その古い思想というものが今、こういう時代にあって非常に輝きを増してきているといえます。

中沢新一さんという、哲学界のキムタクと言われているダンディな先生が、綾部で講演されました。普通は着てきた服のまま講演に

出てきます。でも、その人は、今から着替えると別の部屋に行って、スカッとした身なりになっておられました。話はとてもよかったんです。中沢新一さんはたまたま、創業者のお孫さんにあたる波多野一郎さんが書かれた『イカの哲学』という本に出会われた。波多野一郎さんは特攻隊に配属され、中国で出撃しないとイケない寸前に終戦になって、シベリアに4年間抑留される。そこで当然、共產主義思想をたたき込まれるわけです。波多野一郎さんだけは「これだけではないぞ」と思って帰ってきて、すぐにアメリカに行き、アメリカの自由な空気に触れながら、たまたまアルバイトでイカを仕分けする仕事につくんですね。ものすごくたくさんイカを選別する。するとイカの目に会うわけです。そこで『イカの哲学』が生まれた。

極端に言うと、人間性と言いますが、人間性というのは人間同士の間での思想としてあるわけですね。しかしイカも生き物ではないか。イカにも命がある。仏教でもそれは言っているわけですが、それを改めて自分で感じて『イカの哲学』という冊子をつくられた。それを中沢新一さんが大学生の頃に読んで、ずっと記憶に残っていたというんですね。

それがなんで生まれたか。綾部の風土、ゲンゼという会社の産業思想ですね。平和思想ですね。産業は平和なものである。産業というのは自然と同居しながら育つものだ。自然に逆らっていくのは産業といえないという思想がゲンゼの中にあるわけです。そういう創業者の血を受け継いで、孫が『イカの哲学』を書いた。そして綾部で生まれた大本という宗教は、「人類愛善」、「万教同根」、すべての宗教の根っこは一緒ではないか、何もいがみ合うことはないじゃないか。一緒になって世界平和を目指そうと提唱していった宗教な

んですね。そういう風土があって、『イカの哲学』が生まれた。日本の平和学はこの綾部から始まるんだということを、中沢新一さんは言っておられるんです。それが綾部というところであるということでございます。

### 市長になるまでの経歴

ところで、富野先生から綾部の政治、市政、行政をどういう思いでリードしているのか、リードしてきたかをしゃべってくれということでございましたので、その前段の話をさせていただきます。

資料の『ガバナンス』という雑誌、そこに私の横顔が出ています。大学に昭和34(1959)年に入りまして、すぐに安全保障条約の問題がありまして、1960年安保世代ですね。私は京大でしたが、ドイツ語の高原先生が変わっておって、宇治の分校で、授業があるから出ないといかんと出席したら、高原先生が「今日はこの教室には誰もいないと思った。何人かおるので私は失望した」と言うんです。先生は目の前に生徒がおってなんぼでしょ。おらんことを期待しているのは何かな、と思ったら「円山音楽堂で集会がある日だ。皆、そちらに行くとと思っていた。ここにおるのは残念だ」と言うもんで「私もやらないといかんのか」と思って、それに行ったら単位を貰えるようになるのかなと思って、その頃からデモに行くようになりました。最盛期は京都大学の時計台から円山音楽堂まで、先頭が円山音楽堂に着いてもまだ時計台の前に人が残っていた。学生、教職員合わせて5000人くらいが出たんですね。出ない奴は人間でないかのような雰囲気だったんですね。そういう渦の中に身を置いたということがあります。

昭和34(1959)年に大学に入って38年に卒業して三菱重工に入りました。私はゼミで社会政策をやっていて、岸本英太郎先生の労働問題をずっとやっていたして、三菱重工での配属先が労働組合の窓口だったんです。そこで、労働組合の幹部と接触しますよね。それがいわゆる御用幹部、ダラ幹の典型的なものだったですね。大体、三菱の場合は養成学校がありまして、中学校を出たら全国から優秀な人が養成工で入られて現場でたたき上げて最後は組長、係長で定年退職のコースです。現場コースです。その中でもさらに優秀な人たちが組合幹部になっていく。ところが幹部になるや現場を忘れる。厳しい現場を忘れてしまう。昼間からマージャンをジャラジャラやったり、クラブを2つ、3つ会社が用意して、そこへ行けば組合幹部は飲み食いタダだったり。その請求書が私のところに来るわけです。ボーナスは会社から払う。考えられないことですよ。労組法上から見ても。それが堂々とまかり通っていたので、それはあかんということで組合改革を旗印にして執行委員に3回立候補した。だんだん票は増えていったけど、落選、落選。勤労部の中で最も閑職に配転させられる。次は執行委員選挙に当選するかなという、その直前に大阪営業所に行けという話になって、それを拒否して解雇になった。会社が組合と一緒に解雇してきた。

それに対して私は不当労働行為だと裁判を申し立てた。第一審は約4年半かかりました。これは勝ちました。明らかに不当労働行為だと明快な判決が出ました。二審は高裁。仮処分で負けました。門前払いの感じでした。そういう時代だったんです。そんなことで8年間くらい、そういうことをやりまして、故郷が綾部だったので、綾部に帰ろうか、東

京へ行こうか考えました。こんな私でも、そういう運動の延長線上で「出てこいや」というのがあったんです。当時の総評（日本労働組合総評議会）なども声をかけてくれました。

いろんな人生を経ながら、故郷の綾部に帰るかなと。親父が88歳、おふくろが78歳になっていましたね。私は38歳ですけど。私は決して愛人の子どもではないんです。正妻の子どもだったんですが、親父が50歳の時、おふくろが40歳の時の子どもで、38歳で帰った時にはもう親父が88歳になっていました。両親が二人で家を守っていた。

私は10番目の子どもなんです。おふくろは18歳からずっと子どもを産み始めた。戦前は「産めよ、殖やせよ」で国策として奨励される。戦争で若い男はどんどん死んでいったわけです。国力は人口にもよるということになるわけですから「産めよ、殖やせよ」という国策で、それを忠実に私の両親は国に報いるためには子どもを産むことが大事だとがんばったんですね。国策のおかげで私はこうして皆さんの前に立つことができているということでございますけど。

今は少子化だから、国も結婚してくれ、産んでくれと言っています。産んだらなんぼあげるとか、極端なことを言うと、子どもの出産祝いに一人50万円出しますというところもありますよね。馬鹿げてると思いますけどね。金を目当てに子どもを産むなんてことは、考えてみたらおかしい話でね。そんなことではないでしょう。そんなことで生まれてきた子どもは幸せじゃないですよನೆと思えますけど、それほどまでにやっても、国策に従わんですね。その点は戦前と戦後の考え方の違いだなと思います。

そういうことで綾部へ帰って市議員、府

会議員、途中で41歳の時に市長選挙に出ましたけど、これは見事に負けました。その時、41歳で出て当選していたら全国最年少ですよ。今は20代で市長をやっている人はいくらでもあります。その後、府会議員をやって平成10（1998）年、市長に就任させていただきました。

#### 市役所は総合サービス業 少数だから精鋭

市長になってすぐ、綾部市も平成14（2002）年に財政が赤字に転落すると内部の会議で知らされてまして、エッと驚きました。ほんとにエッだったですよ。市役所の中に入って、つぶさに人々の動きを見ていました。最初に気になったのは、職員がよっぽどひどい水虫やったら別ですよ。そやけどもスリッパ履いてタラタラ歩いている。私はタッタッとすぐ追い越してしまう。歩く速度が遅いんですよ。スリッパを履いているから余計遅い。私はまず「スリッパをはくのをやめましょう」と言いました。なぜならスリッパ履いて、もし地震があつて、市民が犠牲になったら飛び出さないといかん時に靴に履き替えないといかんでしょう。公務員はすべからず市民の安全・安心を守るためにあるわけですから。消防はまさにそうです。警察もそうです。警察官がスリッパ履いてトロトロ町中を歩いていたらどうですか。「やる気があるんか」と皆が言うでしょう。役所でも同じことやと思うんです。私はまずスリッパを履いている部長をつかまえて、何よりもあなたの安全のために必要だと説きました。飛び出す時に何か上から落ちてきたり、けつまずいて倒れたりする可能性があるじゃないか。裸足になって飛び出さないといかんかもしれない。そのことは早く伝わって、スリッパを履くこと

はなくなりました。

それからともかく市役所は総合サービス業である。私はそのサービス業の会社の社長である。だからコストを下げて効果を上げる。市民に最大のサービスをやる。イベントでもコストがかかっている。この中で机、椅子いっぱい聴講の人がおられようと、3人であろうとコストは変わらない。3人やから電気を3つつけて後は消せやというふうにならんでしょう。コストをかけただけの効果を上げるためにはどうすべきか。たくさん入れたらいいわけですね。悪い話には、たくさん入れなくてもいいですけど、よいと思ったらようけ入れたら一人あたりのコストは下がるわけです。ところが、市役所の長い間の体質は親方日の丸、予算は最初に決まってあって、その範囲内でやれば文句は言われません。逆にお金を余したりしたら「予算を立てる時にしっかり事業を検討したんか。一つひとつものごとを積み上げてこの予算をつくったんか？」と言うて、議員から叱られる。上から叱られる。だから使いきらないといかん。今年出張を20回やろうと思っているという部がある。「だろう」ですから、やってみないとわかりません。その予算が残ったら、次の年に20回が15回に切られてしまう。だから何としても20回に到達しないといかん。1、2、3月になると出張が多くなって、今では少なくなりましたが、新幹線なんてそれとおぼしき出張族がウロウロしていましたよ。それが役所の実態だったんです。

そういうものを直していかないといかんということで、私はしきりにコストを下げる、効果を上げる、サービス業だから親切、迅速にね。そして、挨拶、笑顔をしっかりやろうと。箱ものについても同じで、新しいものをどんどんつくらなくてもいい。古いもの

で十分間に合うものはいっぱいありますから。最近、信用金庫が統合して閉店する支店が多くなりました。信用金庫は銀行ですから、ごつい金庫もありますし、なによりしっかりした建物でないといかん。掘っ建て小屋では金を借りにいくことはあっても、預け入れに安心して行けないでしょう。だから、それなりにガッチリしていないといかん。だから、閉店した支店の建物は使えるんですよ。そういうものをボランティアセンターにしたり、郊外にある田舎の「水源の里」近くにあった支店の跡は消防団の分遣所にしたりする。

綾部市は350平方キロで広いんですよ。分遣所を一カ所くらいつくらないと救急車で運ぶ時も往復しないといかん。そうすると1時間以上かかる。助かる人も助からんこともあるので、どうしても出先に分遣所をつくらないといかん。信用金庫の支店が閉鎖になったので、これを分遣所にして、下を「いきいきセンター」と称して住民票の受付、戸籍謄本の受付、印鑑証明もとれるようにした。他にも、京都交通が倒産したので、「あやべ市民バス」、愛称「あやバス」という独自の綾部の市営バスをつくったんですが、そのターミナルにする。そして、いきいきセンターに水源の里振興課をつくりました。他にも、農協跡地をコミュニティセンターにしました。

その建物も買いません。どえらい立派な建物だから、ようけ借り賃がいると思うでしょう。ところが、賃料は固定資産税分にしよう。チャラにしようということで、かなり耐用年数もあるし、一カ月の賃料が3万とか5万円。都会のアパートやマンションの賃料と同じくらいで借りています。それで立派に機能している。そういうことを含めて、いろいろやりました。ともかく新しいことをやるのは好

きなので職員の皆さん方は右往左往して目を白黒させています。最近、ちょっと落ちついたかなと思っていますが。ひょっとして追い詰められて自殺する人が出たら責任重いなと思ったんですけど、案外、人間というものは大丈夫です。

私が就任した頃は職員が478名おったんです。それが今は387名で90名減りました。でも、職員を減らして労働強化になったということはないと思います。そのために係制を廃止するなどして風通しをよくしました。そりゃ、地震が起こったら、皆が忙しいですよ。だけど普通の業務の時はだいたい読めるんですよ。税務課が忙しい時、建設部が忙しい時とだいたい読める。いろんなイベントも決まっている。そういう時にお互いが手伝いに行ったらいい。そのために3年か5年おきにあちこち転勤している。(忙しいときは)応援に行こうと申し合わせればいい。

人の問題については、よく少数精鋭と言います。精鋭の人間が少数で頑張れば、それでよろしいと。でも、それはプロ野球の世界だと思っています。役所の場合は、少数だから精鋭になるんです。「七人の侍」という黒澤明の映画がありますけどね、あれは七人の侍がそれぞれ個性をもって闘う。志村喬が大将になって、村を盗賊から守るという話ですよ。ものすごくたくさんの盗賊を相手に、皆が得手を生かして知恵を出して守り抜く。百姓も竹槍をつくって一緒に闘う。そして守り抜く。少数だから精鋭になるんですよ。精鋭になることは幸せなことですよ。もともと持って生まれた能力は、ものすごくたくさんあるはずですよ、人間というのは。

市役所という組織は、言ったらなんですけど、予算が一番多い時、事業量が一番多い時に職員をワーッと採るんです。事業量が減っ

たら徐々に減らしたり、増やしたりしないといかん。こんなことは普通の会社やったらやりますやん。ところが役所の場合は国体が来たような時にブアーッと増やして、それをそのまま定数として維持する。だから仕事がないのにブラブラしてないといかんということに相成って、結果的には一人ひとりの能力が、新しい遺伝子が出てくる機会がなくなっただけです。こんな不幸なことはないでしょう。ですから、「少数だから精鋭になる、これは幸せなことなんだと前向きに受け止めたらいかがですか？」ということを職員の皆さん方にも訴えながら今までやってきました。私はあと1年半くらいで辞めますけどね、その時には380名までにするとしています。でも、限りなく0に近づけたらいいとは絶対思いませんよ。ある程度、ほどほどのところはあると思いますが、考え方としては「少数だから精鋭」という考え方が必要だと思います。

#### 時限条例で「水源の里条例」を

ところで、今、なぜ水源の里か。私は綾部に幼稚園から高等学校までおりました。綾部の様子はだいたいわかっていました。一昨年1月が、第3期目の市長選挙でした。「3期12年をもって終わります」ということを皆さんに言って「これからの4年間は尽くさざるつもりだ」と言いながら選挙をやらせてもらいました。

その時、つらつら考えてみるに綾部は広いところで、まだ一回くらいしか行ったことがない集落がいっぱいある。そのうちのいくつかを選挙の機会に訪ねてみようと思いました。というのはそういう地域は学問的に言えば「限界集落」です。限界集落というのは高

齢化率、65歳以上の方々が住民の中に50%以上いるところ。これを限界集落と言うんです。大野晃先生が言いました。綾部市には、それよりもっとひどい高齢化率、どんどん人が減ってきている地域、そういうところはずいぶんあるなと思いながらも、見て見ぬふりをしていた。でも最後やからと、そこへ出掛けていったんです。

綾部市全体は350平方キロ、谷が深くて向こうは福井県おおい町に接しています。こういった地域の中で3カ所に行きました。2カ所は私自身、元気が出なかった。「しゃあないな」という感じだったですね。ところが1カ所、市志（いちし）、この集落に行ったら、そこは違っていた。

ここも高齢化比率は100%ですね。市志は世帯数が14、人口が21人、独居老人の世帯が7世帯。あとの7世帯は複数ですが、これまたお年寄り夫婦。子どもはおらんわけです。100%ですから。そういうところに出掛けた。すると、21人全部出てきていただきました。21人、私に投票していただけるなと思いましたが、それはそれとして座談会をやりました。そしたらね、ここはたまたま地域の人々が山落（やまぶき）、今、採りいれの最中ですが、山落を2町歩、2ヘクタールくらいつくっておられて農協へ出して650万円くらいの粗収入を上げておられる。そして、月いっぺん、必ず、用事がなくてもおばあさんたちが集まって茶飲み話をしている。さらに盆の8月14日、市志の出身者、都会で働く子どもたちが家族を連れて帰ってくる。これはある意味ではあたりまえです。それと会社の同僚も連れてくる。今はもう都会生まれ、都会育ち、田舎を知らない、田舎がなくなった同僚もたくさんいるわけです。そういう人たちに呼びかけて一緒に連れて帰

ってくる。普段は20人のところに8月14日になると60人から70人の人々が集まる。やることは焼き肉を食ったりカラオケ大会か盆踊りをやったりするくらいのことでしょうが、それをずっと続けているというんですね。そして、それをちゃんとやっていく意欲的なリーダーが歴代おられる。高齢化比率100%で自治会長さんも75歳とか、一番若い人が70歳くらいです。そういう地域社会ですけれども、しかし明るいんですね。

この4つの要素が備わっておれば集落の再生は不可能ではない。即ち、1つ目に産業があること、2つ目にコミュニティがちゃんとしていること。3つ目は交流があること、特に都市との交流があること。4つ目は、リーダーが存在すること。この4つの要素があれば何とかなるのではないかと感じました。

そこで当選してすぐに検討会を立ち上げました。気候条件は大体、北部共通ですが、雪が降る時は、どえらい降る。選挙の時の平成18（2006）年は1メートル50センチ降って雪降ろしが大変でした。猿とか鹿、猪も、たくさんおります。山落もそうですが、普通の野菜をつくるのでも柵をしたり、網をかけたりして、その中で農業をさせていただいているというのが水源の里の条件です。それほど猪や鹿が跋扈（ばっこ）しています。そういう条件下にある集落の再生をテーマに4月に検討会を持ちました。5つの集落の代表者と私と大学の先生も飛び入りで入っていたりして30時間、6回重ねました。島根県に見に行くなどしながらやってきました。そして、8月に報告書をつくり、12月の定例会で「水源の里条例」を提案し、満場一致で可決しました。

条例の理念としては、何よりも水源の里を存続させる。水源の里の持つ機能を守る。し

かし、いつまでもこの条例は生きているものではない。現に70歳以上の方が対象ですから時間が少ない。5年間の間に何とかしてください、方策方途を見つけてくださいということで「時限」にしました。

そういう緊張感を持たないといけない。年寄りやからと言うて、いたわってばかりいてもあかんです。年寄りだからこそ先はそんなにないので、自分の愛する故郷に、5年間で最後の勝負してくださいということですよ。Iターンの人を迎えるような、Uターンも今までは考えなかったけど、条例によって「光があたってきたな、我が故郷に帰るかな」、そういう話がちょこちょこ出てきています。そういう故郷に光を当てる事業を5年間の間で勝負しませんかというのが、この事業の趣旨でございました。

#### 空き家の活用、都市との交流

水源の里の位置づけとしては、市役所から20キロメートル以上とか、高齢者比率60%以上が20戸未満とか、水源地域であるとか。だいたい皆、水源地域なんですよ。水の源。行けば、ほんとに水がきれい。そこで水源の里に4つの振興目標を立てました。

市志の座談会で得たことを一つの教訓としながら、一つは「定住促進の対策をしよう」と。住宅整備の補助をやろう。150万円を、ボンと渡します。改造でも結構だし、新しく建てるのも結構です。具体的に一人、二人出てきています。定住、そこに住んでもらうと1年間、1カ月5万円ずつ払います。これは交通費が大変だということもありますね。雪降ろしとかもあります。そういうことも考慮しながら特典を出しました。

特に空き家を活用しましょう。空き家は綾

部でも何百とあるんですよ。しかも綾部市に借りたい、買いたいという人が700人。「里山ねっと・あやべ」、綾部市の里山交流研修センターですが、小学校が廃校になった跡地を使って、これも7、8年経ちますが、3000人くらいが寝泊まりも含めて交流してもらっています。そこへ大都市から綾部に来たいと登録している人が700人いる。綾部には空き家状態の家が900軒くらいあるんですよ。でも、あってもだめだという。理由は、正月、盆に帰るとか、将来は綾部に帰りたいとか、仏壇がまだ置いてあるからとか、近所の親戚がどういうふうに言うかわかんからかなわんとか、値段が折り合わないとか。都会で300坪というのと、どえらいことです。都会で暮らしている人にとっては、綾部の実勢価格がなんぼやと言うても、ピンとこないですよ。そんなことでなかなか成立しないという問題があります。

あとは都市との交流を促進すること。5集落を中心としてずいぶん動きが出てきています。これまでは「あかん。何もやらへん、このまま死を待つだけだ」と言っていた人たちが動き始めたんですよ。たとえば京阪神に、ふきのとう摘み取り体験ツアーを募集したんですよ。すると、バスが2台で来たんですよ。しかも雪が降っている時です。雪の下からふきのとうを掘り起こす。そんな作業をするためにわざわざ来るもんかと思いがちなんですけど、やってみたら案に相違して来られるんですよ。そして皆、感動するんです。そこで採れたものを直ちに天ぷらにして食べてもらったら感激するんです。自分がとったふきのとうを家に持ち帰る。たったそれだけのことですよ。しかもバスが奥に入って行かんですから、ショボショボ雪が降るところを3キロくらい歩かないといかんかった。そ

れでふきのとう摘み取り体験ツアーは成功したんです。地元で考えている価値観と大都市の思いは違うんですね。

栃餅（とちもち）があります。栃餅を食べたことがありますか。トチの実ほだいたい、何年かかって実が落ちると思いますか。「桃栗三年柿八年」と言うでしょう。でも、トチの実ほスケールが違いますよ、最低50年。50年の木にならないと実ほ落ちてこない、ちゃんとしたものは80年くらい。今、植えてもここにおる人は誰も食べられせん。それくらい貴重なものです。その貴重なものほ、昔ほ栃餅にして実際に販売してた。でも、トチの実ほ鹿が喜んで食べるんです。こっちは年を取っているから、山の奥に実があることはわかっていても採りに行けない。50本くらい群生しているところがあることを知っていても、全部鹿にやられる。栃餅をつくっていた人もやめたんです。それを起こそうと、サポーター、ボランティアに出てもらって地元の人と一緒に鹿避けの柵をつくって去年からとり始めました。栃餅を加工してつくって売っ出して、今は阪急のカatalogにも栃餅がメニューに入りました。結構、引き合いがある。テレビも映してくれまして、100万円くらいは売っ上げを上げているのではないですか。それもおばあさんが集まって5、6人でやっておられる。そういうことが始まりました。

都市との交流が始まりました。地域産業も出てきた。とは言っものの、相変わらず昔の便所、おつりがくるような便所ではなかなか若い人に飛び込んできてくれと言っても来ませんよ。水洗化をすることも必要でしょうし、山の奥でも携帯くらいはかかるようにせんかん。光ファイバーもないですね。これを通せば、今はものを書いたり、設計したり

する人は何も都会におらなくてもいいわけです。賃料の高いマンションにおらなくても、こういう地域で十分やれる。

### テレビ報道で限界集落に光があたる

そういう動きの中で5集落が協議会をつくって、ほとんど全員が集まりました。それだけ気合が入ってきた。綾部市もそんなに金を出していない。なのに、こういう流れがどんどん出てきたのはなぜか。これは面白いことだったなと思います。水源の里条例をつくった一昨年12月、綾部市議会にNHKのテレビが入りました。私が水源の里条例を提案したことをテレビがニュースで流した。それからわかに様相が変わってきました。「瓢箪から駒や」と、言うところなんですけど、朝日、毎日、読売、日経が、それぞれ社説でダーツと採り上げ始めた。折から去年夏に参議院選挙があつて、自民党が大敗した。小沢一郎さんが岡山の田舎に行き、そこで第一声を始めた。安倍総理大臣（当時）は東京の渋谷か新宿で第一声を始めた。この舞台の違いですよ。何も民主党が田舎のことを考えて田舎に足を持っておったかという、何も関係ない。テレビ現象が大きいですね。綾部市の「水源の里条例」についても、マスコミに一瞬、光をバンと当てられたことが、大きなインパクトになっています。この水源の里、「消えゆく集落を何とかせんかん」ということは全国どこの市町村長においても課題になっているから、そういう条例もあるはずだと思っってたんです。ところが案に相違して「集落の再生について条例をつくったのは綾部市が初めてだ」となったわけです。ほんとに私は知りませんでした。テレビカメラが議会に入ってきて初めて、えっ、そうかと。

というのはね、今までも国も府も市町村も過疎対策はもちろん大きな命題としてあった。平成22(2010)年3月31日までが期限ですが、国の過疎法です。何度か更新しながら36年間の間に76兆円という天文学的な数字を過疎対策といって投資しているんです。過疎対策といって投資した76兆円という巨大なお金が、こういう水源の里の地域にどういう使われ方をしたのか。せいぜいそこへ行く道路の改修に使われたくらいですね。本当に必要な、産業とかコミュニティ、文化芸能を起こすとか、Iターン、Uターンの人を迎えるというようなソフトの事業には何も使われてないですね。

この76兆円の予算は何に使われたか。人口減少率に着目したんですよ。しかも市町村単位なんです、集落単位ではなく。綾部市でかつて人口が5万人いた。20年間で3.8万人に減った。このように綾部市の場合、人口は徐々に減っていますが、減り方が少ないということで対象にならなかった。どうしても町村が中心だった。やる内容は道路もございました。林道もございました。ちょっとした産業を興さないといかんということで工場誘致、工業団地をつくる、出先の診療所をつくる。学校統合でお金があるからそれに使う。道路、箱ものに76兆円のお金が投入されました。全然効果がなかったとは言いませんけど、いわゆる過疎の中でも中心市街地の部分はこの予算で結構潤った。特に建設業の皆さん方は76兆円、ほとんど建設業の仕事ですから、地方の経済にとっては大いに潤いがあったでしょう。しかし過疎の中の過疎、水源の里というのは、その中でさらに切り捨てられていった。これが現状だったんですね。

私が水源の里、集落一つひとつに着目して、これを再生していこう、これを残してい

こうという発想で打ち出したのが、たまたま日本で初めてだったということです。そこで自民党大敗、地方区の格差の問題も言われて、何となく「この問題は地方格差の典型ではないか」とにわかにクローズアップされたというのが真相でしょう。そんなことで採り上げられたので「この機会を逸してはいかん」と思いまして、直ちに去年10月にシンポジウムを綾部でやりました。議員や自治体の関係者、NPOの活動をしている人たちが内外から800人くらい集まった。手応えを感じました。NHKの衛星放送がシンポジウムの様子を1時間番組で去年暮れに流してくれました。そういうこともあってテレビカメラが次から次に集落に入っていった。対応するのも大変ですが、今まで何も入ってこなかった、テレビに映るなんて、まずなかったところが急に映りだした。自治会長がインタビューを受けるようになる。だんだん慣れてくると最初は腰が曲がっておったのが、どんどん腰が伸びてくるんですよ。そういうふうになんか元気になってこられる。人間というのは、光が当たれば元気になるんですよ。

そんなことで綾部市だけに留めておくわけにいかんということで、全国の水源地の里がありそうなところ呼びかけました。シンポジウムに来ていただいた27人の首長さん全部に呼びかけ人になってくれといって、全国にバツとやりました。11月30日、東京の都道府県会館でやった時には、146の自治体から250の方が参集してくださいました。自民党の政調会長の谷垣さんや公明党の斉藤政調会長や各省庁の皆さん方含めて、たくさん寄ってきてくださり、マスコミの取材もありました。そんなことで協議会が発足しまして、今、160になりました。自然にちょっとずつ増えてきています。10月28・29日

には、福島県喜多方市で第2回目のシンポジウムをやることが決定しています。ずいぶん広がりを見せてきました。喜多方のシンポジウムには増田総務大臣も「ぜひ出掛けていて皆さんと意見交換したい」とおっしゃっていただいています。

#### 事を成功させる4つのヒント

こういうふうには綾部市の一つの集落で話し合いを始めてから2年間、わりと速いスピードで広がってきました。このことは水源の里の問題に限らず、皆さん方が何かイベントを仕掛けられたり、商売をされたりするときでもそうです。そのときのヒントになると思います。4つくらいあります。一つはね、動機が善なるかどうか。「動機、善なるや」。京セラの稲盛さんが言っています。それが事業を出発することにあたって一番考えないといけないことだと。本当に世の中の人のためになるかどうか。それが大事だと。

二つ目は「時代にあっているかどうか」。その点について言えば、今、水源の里というものに対する理解が非常に得やすい時代である。何をにおいても環境がすばらしい。しかも山の中です。豊かな緑がある。緑は地球温暖化を防ぐ、CO<sub>2</sub>を吸収する。さらには、「山は水の固まりだ」という人もありますが、まさに山こそ水を保全するわけですね。そして水について言えば、これからは石油よりも大事にされる。水の売り買いが行われる時代に入ってくると言われています。南北アメリカはまだ一人あたりの水の量は非常に多いですね。アジアはだいぶ下がってきました。中国の水の使用量は、高度成長にあわせてものすごく増えてきています。水の使用量は大事だということもございます。

林業、これも今までは国外の外材が安いということでロシア、インドネシア等々から輸入して賄っていましたが、台湾のヒノキも輸出禁止ですね。ロシアからもだんだん値段が高くなっています。インドネシアも上がった。中国も輸入国になった。日本は至るところに山があり、植林しています。大事なのは、せっかく植林したのに間伐されていないから、スギが全部細い。陽が差さないから下草が生えない。根っこが広がらない。ですから、間伐しないといけない。そうすれば大木になって根を生やして、水も保全する。国土も保全できる。国土保全的に見ても林業を改めて見直す。

贈収賄で捕まったけど、和歌山県の木村知事（当時）は「緑の公共事業」をやろうと。道路をつくるのもいいけど、今、目の前の先祖が植えた山が間伐せずに放置されている。保全の意味でもマイナスになっている。そこに手を入れよう、そういう公共事業をやればいいじゃないかと、緑の公共事業をしようとした。これはいい発想だと思います。水源の里の地域が守られていれば林業が再生する拠点になるわけです。前線基地になるわけです。上流と下流との関係、特に上流は下流のことを思う。「ここで変なものを流したら下流の人が困るじゃないか」と常に考える。下流の人も「きれいな水が飲めるのも、上流の水源の里の皆さん方がちゃんと水を守っておってくれるからできるんだ」と下流は上流に感謝する。下流と上流の共生・連帯という気持ちは日本には大昔からあったんです。それが高度成長になって途中で切れています。そういう精神を、もう一度復活させたい、復活させるべきだという思想が今、大いに広がりつつある。これも追い風だと思います。

それから三つ目は「グローバル」というこ

とだと思えます。グローバルは、地球規模、大規模です。ローカルは、地域とか市町村、集落です。これを合わせて、ローカルに足をつけてグローバルに物事を考えよう、これがグローカルだという造語ですね。グローカルの視点がないとだめだと思います。たまたま綾部市でやってみたら、こんなにたくさんの人が注目してくれた。環境問題は綾部市だけの問題ではない。綾部市だけで環境が守られるということはありませんよ。当然、全国の市町村の課題であり、極端に言えば全世界、地球の問題です。グローカルに物事を考えて、それを実行に移すことが大事だなと感じましたね。

最後は「スピード」ですね。水源の里というのは、1000 年、2000 年の歴史があって、急に再生といっても時間がかかる。「ゆっくりやればいいわい」と思いがちですよ。農業・農村問題はゆったりしている、のんびりしているという思いがある。だけど、見てみるとそれが落とし穴になっている。時代にどんどん取り残される。時代はどんどん走っているわけで、昨日、話題になったことが今日は吹っ飛んでいる。

水源の里だって、アッという間に消えていくんですよ。だからスピードが必要だと私は思いました。そして何をおいても平成 20 (2008) 年度の政府の予算の中に、具体的に芽を出させるということで、これは内閣府とか総務省とかに言まして、内閣府では 25 億円、地域再生の予算をつけてもらったりしました。私が常々言っているのは年 1000 億円でもいい。10 年間で 1 兆円。76 兆円もいりません。10 年間で 1 兆円あれば、やる気のある集落なら必ず再生します。市町村と集落の人が一緒に協力しあえば、そういう流れが出てくるはずだと。時代はそういうふうに移

っている。今でも、1 万人に一人くらい、「そういうところで暮らしたい。定年になったら年金はどこでもついていくから、そういうところで夫婦でゆっくり暮らしたい」という人が必ずおる。「それがどんどん増えてくるのが、これからの時代だ。農業・農村の時代なんだ」と私はしきりにプロパガンダしているわけでございますけれども、そういうふうになりよりますよね。

そんなことで時間が来ましたので、これでやめます。もっと言いたいことはありますけど、皆さん方のご質問にお答えするということで、後の時間を送りたいと思います。どうも皆さん、ありがとうございました。

#### [質疑]

**富野** 四方市長、どうもありがとうございました。大変熱弁を振るっていただきました。政治家は果たして、どういうものとして理解したらいいのかという思いでお話を聞いていました。私も 8 年間、市長をやらせていただきましたので、自分なりに政治家というイメージはあるんですが、通じるものがあるなということ、すばらしいことをやっていらっしゃるなど、つくづく思いました。

今、地方分権といわれていますが、地方分権といわれながら本当に地域が元気になっていくのかということがあるわけですね。政府は地方分権をした以上、権限や仕事が地方に行くので、地方は自立してくれと。そういうことで政策を打ちます。市町村に言うてくるわけです。しかし、本当に地域の人たちが自分で何かをつくりだす、そこで自分の力で元気になっていく仕掛けやお金の使い方ができるかがポイントだと思います。おそらく思いは同じなんですけど、農業や過疎対策は、実はそういうことになっていない。その

ために逆に地域が疲弊している。本当に必要なところにお金が回っていかない。人が動けない。まさに、そこをどのように突破しようかと各地域で今まで悩んできたわけです。これは過疎地域だけでなく、都会でも高齢化した団地がたくさんあって、そういうところに目が行かない、光がいかない。

そこで一つ政治家の要件として、私はキャッチコピー、その時代を表す言葉、これからやらないといけない言葉を明確に示す言葉をキャッチコピーと考え、それを通して大野先生と四方市長さんの違いが明確になると思いました。学者がキャッチコピーをつくり、「限界集落」というのは学問的にいいキャッチコピーです。一言でわかる、聞いただけで定義がわかる。学者としてのキャッチコピーとしてはすばらしい。研究レベルです。しかし、社会的にどうか。そこにいる人たち、その対象となっている人たちが逆方向に消えていってしまう。一方、政治家のキャッチコピーは何か。そのところに光を当てていく。光を当てることによって人々が元気になっていく。そして将来をつくっていく。社会をプラス方向に変えていくキャッチコピーが、政治家のものだったと思います。そのためには単に感覚が優れているとかだけではだめで、時代を読む、その中で課題の本質をつかむ。そして、それを地域の当該の人たちと共有する。さらに、共有したものを全国の地域全体に共感の輪を広げていく。そしてマスメディアや時代性をつかんで現実に展開していく。そういうプロセスが政治の中にはあるわけですね。

私はお話を聞いていて、四方市長はこれを見事にやっていらっしゃると思いました。おっしゃる通り、時代がなければ、確かにできなかったかもしれません。しかし、時代を読

み取って、スピードをコントロールしながら、それをおやりになった。ほとんど希有なことだと思います。全国に首長さんがいらっしゃいます、国会議員もたくさんおられます。でも、こういうことを実際にやれる人、やった人はそれほど多くはないわけですね。こういうことは、どこでもいろんな地域で課題があって、それを待っている人たちがたくさんいるわけです。だいたいそういう人たちは切り捨てられる側にある。社会を大きくしていく中で、余計者であるとか邪魔とか足手まといといわれ、そういう人たちが自分たちの将来を見失ってしまう。これは都会でもニートとか若者の間でも起きているわけです。そういうところをすくい取るのではなく、同じ目線で受け止め、同じ目線で行動するのではなく、それを政治の目線で展開していく。こういうことをやらなければいけないということだと思います。そういう意味で、今日は私も大変、すばらしいお話として受け止めました。皆さんもお聞きになって行政とか運動ではない、政治の姿を、政治が必要としているものについてご理解いただくことができたのではないかと考えております。

分権時代、確かに地域や自治体は頑張らないといけない。でも、ここでおっしゃったように国が76兆円使ってもできなかった。地域がちゃんと動けなかった。逆に地域だけで動けるかというと、決してそうではありません。財政の問題もありますね。分権時代といえども、地域が主体となって人々がつながり、国をきちっと動かす仕掛けを地域からどうつくっていくことができるかということが、分権時代にとって重要な問題であることをお示しいただいたと思います。本当にすばらしいスピーチをありがとうございました。感謝申し上げます。

皆さんもいろんなご感想、質問をお持ちだと思います。限界集落はものすごく厳しいんですよ。うまくいくのでしょうかという思いを持ちながら聞かれた方もあるかと思います。感想を含めて皆さんから出していただければと思います。

#### 田舎自身がよそ者を締め出していないか

**質問** 綾部市の東部の山をどんどん登っていったところの過疎化が、とりわけひどいと思いますが、綾部市に限らず、一つの大きな問題点は農地の流動性にあるのではないかと思います。つまり農業委員会が農家資格を与えない。事実上、農業ができないわけですね。結果的に田舎自身がよそ者を締め出しているという要素があるのではないのでしょうか。農地の流動性を高めることができれば、若い人でも農業をやりたい人がいるのではないか。僕も実は農業をやりたい方です。八木町の畑を借りていますが、田舎へ行けば行くほど閉鎖性を感じることがあります。山へ行けばもっとそうなる。山の場合は地域の在りが所有している山がありますので、「誰が間伐するの?」と言われても地域に若い人がいなかったらやりたくてもできない。やったらいいいことはわかっているんですが、若い人たちがいない。若い人たちも「タダでやるの?」となると日当が出ないならやらない。そんなに言われるなら、都会で日当もらった方がいいよということで、その地域から逃げていくとなるわけです。林業はもっと閉鎖性が強いような気がします。農地の流動性を高めることは不可能なんではないか?

**四方** 閉鎖性というのは、以前、農村として体制がとれて後背地もなくて、ちゃんとし

ていた戦前の時代なんかは、よそ者はなかなか入れない時だったと思います。今もそういう名残はありますね。「もうこのままで諦める」というところは、そのまま死に絶えるでしょう。でも「何とかしないといかん」と考え始めて、若い人の意見も出てきてという段階で、ずいぶん開放的になりつつあることは確かです。外へ勤め始めているということもありますね。そういう点では、後は条件と閉鎖的な考え方、意識を加速度的に改めさせることです。

#### 農村特区を申請

**四方** そのための物的な基盤として、農地の問題と家の問題があります。農地の問題については綾部市が「農村特区」を申請しまして、従来は東部の地域に約3～4反買わなければ農民になれなかった。それを1反でもよろしいと変えました。1反というと借りるのは簡単ですが、買うのでも水源の里まで行ったら、のしつけてタダでもいいところも場合によってはある。ほぼ整備しているところでも、一畝(300坪)30万円から50万円出せば喜んで売ってくれるでしょう。今まで百姓やっていない人でもできるよう、規制緩和で基準をうんと低くしました。家の問題は先程のような問題があります。たまたま空き家があつて入ってきても、集落のきまりで年に3回は溝さらいに出ないといかん、道づくりに出ないといかんとか。祭りの共同作業とか従来からの慣習にすぐ入れということもあります。それをやるとアゴを出して逃げて帰るというのも事実あります。そういう経験を皆さん何回かしていますし、そういう話も行き渡っていますから、「入ってきても、あまり手荒う扱ってはいかんぞ。自治会の会費も

安くしないとあかんぞ。氏子も慌ててするな。」ということは感じ始めています。でも、空き家がなかなか出ないので、綾部市は水源の里2カ所に市営住宅をつくろう、いっぺんやってみようと2戸だけつくります。20～30戸つくったら大変ですから2戸つくってみようということで8月から工事にかかります。広い土地に2LDK。快適ですよ。我々がやっているところの予算を明かすと、平屋で1300万円くらい。そのうち600万円は国から補助金が出る。600万円で綾部市では建つわけで、それを15年で返済してもらったらい。途中で払い下げにも応じる、時価だね。そういう条件をつけて2戸建てます。実際に「人が来るな」とわかり始めたら、皆、考え始めるんです。離れが空いている、台所もある、風呂もある。そのままにしておく勿体ないと感じ始める。

変化はちょっとしたことから始まります。意識が変わっていく。農地の問題、家の問題も具体的な政策を打ち出すことで変わってくると思っています。農地の問題は綾部市が1反にしたら全国に広まって全国的に1反でOKだと思いますよ。そういう時代に入ってきました。

**富野** 今のお話でいくつか重要なことがあったと思います。一つは地域が「国の法律がこうだから」とすぐ諦める。「制度がこうだと無理だ」と思うのではなく、地域の実情にあわせて逆に法律を変えさせる。特区はまさにそうですね。法律を変えさせる。制度、運用を変えさせることは工夫できると思います。工夫をしていくこと。そこですばらしいと思うのは全国協議会をおつくりになった。そうすると情報が共有できるわけです。「こういうふうに工夫したよ、通ったよ、こっちもこうできるね」と情報を交換しながら、

いろんなことがよくなっていく仕掛けをつくられたのはすばらしいと思います。仕組みを国がつくってくれるのを待つのではなく、自分たちで工夫してつくっていくことをおやりになっていることは学ぶ必要があると思います。

農村の問題ですが、農村の仕組みは合理的にできているんです。今の社会では不合理かもしれないけど、少なくとも江戸時代、明治までは合理的な制度だった。それは因習によって決まっているのではなく、合理性によって決まっていたんですよ。時代が変わって今の時代、新しい合理性のある農村の形成ができるはずですよ。高齢者が多くなって人も少なくなると、知恵が集まりにくくなってしまおうと、合理的な設計ができなくなってしまうことが問題で、農民の人たちが情報を得る、都会の人と接触して、何が自分たちにとって合理的で、生き延びやすいかを感じていただくことも大事ではないかと思います。人間は合理的に生きる生き物だということですから、因習とかガチガチに固まっているというふうに、あまり考えすぎると難しいと思います。

**四方** 我々の世代は田舎の因習とか、朝は朝星、夜は夜星で百姓に明け暮れて土にまみれて真っ黒になってクタクタになり、「そんなん、かなん」ということで都会のネオン、ビルに憧れてどんどん出ていったという歴史ですよ。それがずっと続いて60年以上経ったわけです。振り返ってみたら水源の里が残っているわけです。おばあちゃん、おじいちゃんが残されている。そういうところで今度は、都会生まれの都会育ちの人たちが、ずいぶん増えてきたんですよ。自分のところのルーツは何だろうと考えてみたら田舎が多いんですね。そこには親戚はなくなっ

ているかもしれない。しかし、地域にまだコミュニティが残っている。一緒に道普請（みちぶしん）するとか、山に入るとか、祭りをやるとか、うっとうしいかもしれません。我々の世代は、そういううっとうしさから逃れて都会に出てきた。でも逆の、そういうことが結構楽しいんじゃないか。挨拶も交わさない都会の生活よりも、うっとうしいかもしれないけども、その方が人間らしくていいじゃないかというふうに、ちょっと視点を変えれば、水源の里とか農村・農業地域に対して関心が高まってくるんですよ。そういう若い人たちが大都市で確実に増えてきていることは確かです。

農業・農村地域、水源の里問題も、今は迫い風だと私は思っているんです。今まではそれを表に出して言うのは気恥ずかしかったんですよ。綾部にわざわざIターンした人が、タオルをもって、近所に挨拶に回ったら、何軒かのおばあちゃんが「ようあんた、こんなところに来れたな」と言われたのにガクッときたとおっしゃっていましたけどね。ずっと住んでいる人にとってみれば、どんどん人が少なくなって、ここはもうこれで終わりなんだと。なのに、そういうことがヒョンと出てきたら「なんであんた、来たんや。都会で悪いことをしてきたんやないか」と、そういうふうに思うのは無理ないんですよ。その時に私は「よう来られた。ここはいいですよと言言ったら、全然違いますよ」というふう

に、皆さんに言ってるんですけどね。そういう時代に、今、入りつつあるんですよ。だから地元の人が心を開いて、手を広げて、来た人に笑顔で迎える。やってきた人たちが溶け込んでもらうのをじっと待つ。そういうことも我々は「水源の里」事業を通じて、全国の地域の皆さん方にPRしていかねばと思っています。知らしめていかないといかん。

**富野** そういう中で行政が果たす役割は結構大きいと思います。個人でやるとカチンとくるんだけど、行政が言うのと素直に聞いていただけることもあると思います。行政はいい役割ができると思いますね。私も島根県の農村に住ませていただいて、いい経験をしました。過ごしやすいんですよ。中に入ると過ごしやすい。私のゼミも水源の里の一つで合宿します。今の若者は関心を持つんですね。どんどん変わっていています。

**四方** ちょっと宣伝させてもらいますけど『水の源』という水源の里全国連絡協議会の機関誌を創刊しました。第2号は8月1日。年4回出ます。購読料は年1000円。全国の157の自治体にも行っています。ぜひご関心のある方は購読していただけたらありがたいと思います。また、水源の里の事業が始まってつくった特産物があります。水源の里の山路と北海道の昆布を合わせて阪急百貨店の地下で売っています。ジャンケンで勝った人にお土産に。

[2008年6月21日]